

Love and Action～ラオ紀子さんを覚えて～

日本基督教団東北教区被災者支援センター・エマオ 元・教団派遣専従者
荒尾教会 牧師 佐藤真史

〇はじめに

わたしは日本基督教団東日本大震災救援対策本部より、2012年春から2017年春までの5年間、東北教区被災者支援センター・エマオ（以後、エマオと略）に遣わされました。牧師として、ボランティアコーディネーターとして、深い出会いをいただいた5年間でした。その一つが、「いずみ」を通して出会った方たちです。

「いずみ」が立ち上がる際、海外教会より多額の献金をいただきました。特に UMCOR(合同メソジスト救援対策委員会)からの献金は、大きな励ましとなるものでした。わたしは献金依頼状や申請書、定期報告を作成する作業をお手伝いさせていただきました。エマオの仕事もあり決して楽ではありませんでした。自分自身学ばされることの多い働きでした。

また、献金をして下さった海外教会の方たちによる被災地訪問のコーディネートをする際に、「いずみ」を訪問し報告を直接聞く場を設けるように務めました。受け入れる「いずみ」のスタッフたちにはご負担をかけましたが、放射能問題への関心は高く、その価値は十二分にあったと信じています。

〇ラオ紀子さんとの出会い

キリスト教会の働きですから、献金活動を具体的に誰がどのように担ったのかを、詳しく報告する機会はほとんどありません。けれども、海外教会からの献金を取り次ぐ働きに関わる中で、「いずみ」を支えるために、影で労力を惜しまず仕えるキーパーソンが必ずいたことを、ここに記したいと思います。

その一人が、合同メソジスト教会(UMC)のラオ紀子さんです。紀子さんは、東京の阿佐ヶ谷教会出身で、若い時に渡米し、キャリアとご家庭を築かれた方でした。3・11が起こればすぐに紀子さんは来日し、まずエマオとUMCORを繋げ、何度も仙台・石巻被災地へ足を運んで、わたしたちと一緒にボランティアワークをしつつ、並行して、アメリカにあるUMCOR本部と調整し、申請書や報告書に関してアドバイスをして下さったのです。

被災者支援活動は「初動支援」に資源が集中しがちですが、紀子さんは「中長期支援」の重要性を深く理解しサポートして下さいました。そして放射能問題への思いと祈りも深く、「いずみ」を立ち上げる際に、UMCORから多額の献金をいただいたのも、紀子さんあってのことだったのです。直接的なUMCORとの繋ぎ役から離れた後も、いつも「いずみ」を気にかけて下さっていました。

紀子さんは、2020年9月に80歳で召天されましたが、その十日前に突然、紀子さんから久しぶりのメールをいただきました。ワシントン州にあるUMCの医療施設からのメールでした。

5月末に"Habitat for Humanity"のボランティア中に急に倒れ病院に運ばれ、いまは末期ガンと共にあると綴られていました。お祈りと近況報告を返信するとすぐに「Thank you!」と短い返信を受けとり、それが最後のやり取りとなってしまいました。

Habitatとは貧困などで安心して暮らせる住居のない方たちのために、住環境を作っていくボランティア団体です。その精神は、まさにエマオや「いずみ」と繋がっています。ですから、紀子さんからのメールを読み、とっても紀子さんらしいと思いました。一人のキリスト者として、最後まで"Love and Action"を胸に刻まれ歩まれたのです。

「いずみ」のかけがえのない働きに、紀子さんのようなキーパーソンたちの祈りと愛と奉仕があったことを覚えていきたいと思います。

2022年6月記



2013年9月。エマオ石巻（宮城県石巻市内）にて。

二列目右端がラオ紀子さん。

左隣はMelissa Crutchfieldさん(UMCOR)。

著者、前列左端。

この被災地訪問後、UMCORから「いずみ」への支援が決定した